

雜 纂

テオドール・ビルロートの書簡集から

ト 庵 老 生

紹 介

外科学の講義を聞いた者或は外科学にその一生を捧げて居る人々にとって、ビルロート (Billroth) の名は真に大きく響く存在である。ビルロートが近代外科学黎明期に爲した努力は並大抵のものではなかつたのであるが、旺なる現代の外科学がその土臺の一部を彼の努力に置いて居ることは誰人と雖も否み得ないであらう。

彼は一方に於て勝れた科学者であつたが、他方また繊細な感情を持つ藝術家でもあつた。彼の書いた手紙は纏められて数巻の書籍となつて居るが、これを読むと當時の彼の生活を如實に知ることが出来るのみでなく、また當時の學的雰囲気も十分に窺ふことが出来るのである。

偶々最近半井朴ドクトルが、猪子名譽教授御所藏のビルロート書簡集から意の赴くまゝに数十篇を翻譯されて、教室藤浪講師 (樂岡子) に贈られた。そこで編輯子は關係各位の御許しを得て、本誌本號の紙上から順次掲載することにしたのである。

現存の本邦外科学界人でビルロートを直接知つて居られるのは、おそらく猪子名譽教授御ひとりと思はれる。また譯者半井朴ドクトルは嘗てライプチヒ大學で勉學中チールシュ (Thiersch) の講義を聴かれた方、即ち書簡集の出所及び譯者を取て紹介申しあげた所以である。

昭和 14 年 夏 至

編 輯 子

ビルロート小傳

其 家 系

ビルロートは「俺は獨逸人だ、墺國人ではないぞ」と後年ウキン大學外科教授になつてもこれを誇としてゐたが、實は其祖先を遠く尋ねれば佛蘭西人と瑞典人の混血兒であつた。そして幾代かの後に父なる人は、獨逸フロキセン領東海一孤嶋リュゲンのベルケンと云ふ一小市の新教の牧師であつた。母の家系は詳かでないが、グライフスワルト市の産であり、頗る音樂の趣味があつた人らしい。それから又ビルロートの妻となつた、女の祖父母は2人とも音樂界の人々であつて祖父は當時有名なるテノアの歌手であり、祖母もソプラノの歌女であつて、オペラ劇場の花形であつた。こんな遺傳やら因縁やらで、ビルロートは幼少の時から音樂には大なる趣味を植ゑつけられてゐたらしい。ビルロートは5人同胞の長兄として1829年産れた。

我朝にあつては蘭醫ジールト事件で物議騒然たる時代であつて、實に今を遡る事 110 年前の事であつた。

6歳の時58歳の父を失ひ、以後は専ら母の手一つで育てられてゐた。父は牧師であつたから家産には固より餘裕があつた筈がなく父の死後、母は縁者をたどつて、一家をつれて東プロシアのグライフスワルト市に移住する事となつた。そして8歳の時同地の中學校に入學した。

此時丁度ナポレオン三世が佛蘭西の帝位に即き、また獨逸の大醫フウフェランドが74歳で歿した。そして西曆1836年は我朝に於ては孝仁天皇天保7年に相當する。

中學生としてのビルロートの學業は頗る劣等であつて度々落第した。即ち第6級の時に2ヶ年、第5級に1ヶ年半も置きざりにされて愈々第4級に進級した時にも、地理學に興味を覺えて地圖製作に熱中して他の學業を怠たり、第3級生となつてもまた2ヶ年も置き去りとなつた位で、特に羅句、希臘の古典語學は頗る不成績であつて他の同級生に比しては甚だ劣つてゐたので不得止校外教授で之を補つて貰はねばならない位であつた。此時分からビルロートは何に感じたものか知らないが、心機一轉したものが豁然として學事に勉強する事となり羅句、希臘の古典語學は勿論の事、佛蘭西語さへにも熱中する事となり、生來好きな音樂趣味から全く遠去かつた。然しその代り繪畫が好きになり又所謂美學にも興味を持つやうになつた。蓋し8ヶ年で卒業すべき中學校を前後12ヶ年を費してゐるのを見ると中學校の學課には少しも眞面目な勉強振りでなかつた事が解るが、左ればとてカフェーやバーなどに入出して兩親を泣かす不良青年でなかつた事だけは確かである。ビルロートは19歳でやつと中學を卒業した。此時分に母なる人は既に長き病床に横はり、又多くの同胞があつたから貧乏牧師の長男として醫科大學に入學するだけの學資などは勿論なかつたのであるが、如何なる考へから醫學に志したか解らないがグライフスワルト在住の伯母の補助を受けて同地の醫科大學に入學した事は確かである。だから日本によくある牛乳や新聞賣りをして勉強する苦學生とは其趣きを異にしてゐる。當時グライフスワルト大學醫科に外科のバウム教授(Prof. Baum)と云ふ人が居つた。そして如何なる縁故があつたか知らないがビルロートは中學生時代から特別の知遇を得てゐたと見えて此人から多大な指導を受けてゐたらしくビルロートが醫學に志したのも此教授の影響であつただらうと思ふ。蓋しビルロート氏書簡集に500通の書簡があるが、此教授に宛てた書簡がその500通の中27通あるのを見ても解る。其後のビルロートの經歷はト庵の調査したビルロート年表を見れば解るが左に其大略を記載する事とした。ビルロートは21歳の時バウム教授がグライフスワルト大學からゲツチンゲン大學に轉任すると同時に同教授と共にゲツチンゲン大學に轉校し、其翌年ベルリン大學へ轉校したのは22歳の時であつた。此時母を失ふた。其後當時外科の御大であつたあの有名なるランゲンベック教授の外科教室の助手となつて勉強してゐた。

此時ランゲンベック教授は43歳にて、ビルロートは25歳であつた。そして佛蘭西に於て Pravatz がはじめて皮下注射法を發明した年代であり我朝にありてはベルリ浦賀來航、又蘭醫モーニケによりてはじめて聽診器が我國へ齎された時代であつた。

その後25歳にしてビルロートは伯林大學を卒業した。が固より大學に踏み止まつて大學に於ける學堂醫學の行程を歩んで行くだけの家産に餘裕がある譯がなく忽ちパンを求めなければならなかつた。最初奉職口を求めてダンチヒ市立病院の助手とならんとして全く失敗したので伯林市内の一町醫となつて門戸を開いて見たがさて左様に簡単に病客が来るものではない。3ヶ月間と云ふものは1人も病客はやつて來なくて全く門前雀羅の状態に、案に相違した若きビルロートは唯茫然として將來如何にしてよいかと考へても一向分別もつかず唯獨りつくねんとして憂鬱な月を送つてゐたが、丁度此時に同郷にして同學の友人であつたフオクは卒業後直ちにランゲンベツク外科教室の助手となつた人であつたがビルロートのあまりに悲惨な氣持に同情してビルロートに云ふた。

(F) 『オイ君！ そんなに悲觀するなよ！ 大學を卒業して町醫になつて店を開いたつて左様に早く御客が来るものでないぞ！ 横町の料理屋だつてさうじゃないか！ そんなに朝から晩までつくねんとして來もせぬ御客を待つてゐるよりは、寧ろ僕と同じ様にランゲンベツクの助手になつた方がよいぞ。何れにしても食へないのは同様だ！ 待てば海路の日和と云ふ事もある幸ひに教室にはもう1人助手が入用だと云ふ事だ。』

こんな友人の勸告からビルロートはランゲンベツクの教室の人となつた次第である。これがビルロートの大學に於ける學堂醫學者になる第一門であつた。ビルロートがランゲンベツク外科教室に入つてから同教室の外科私講師になるまでに「4ケ年」を費してゐるが、其間どうして生活してゐたか解らない。多分教室附近の下宿の屋根裏にくすぼり込んでゐた事だらうと思ふ。1856年(我朝安政3年)ビルロートが28歳の時にやつと大學外科の私講師となつた。大學私講師なるものは別に定まれる俸給がある譯ではなく多くは無給であつて學生相手に講義するとか、講習をするとか、内職をするとか、著述をするとかして生活費を求めなければならぬのが普通である。それでビルロートは外科學一般の講義、病理解剖の講義によりて10人あまりの學生から講義料を得る事によつて僅かに其日の衣食を求めなければならなかつたが、その聽講生の數は少なくともあり、又不拂者もあるのでこれだけではとても生活して行けなかつたのは當然である。よつて開業醫の間議とか手術とか云ふ内職によりて生計費の補缺を計らなければならなかつたがそれでもまだまだ不足であつた。それで著述を思ひ立つて「一般外科學及其治療」と云ふ著書に筆を染めたがまだ無名の私講師の著述であるから思ふた程の収入のなかつたのも當然である。然し此著述によりて多少其存在を認められるやうになつたのも事實であつた。そして3年の後瑞西チュリヒ大學から外科教授として招聘せられたので渡りに船として早速獨逸伯林を去つて瑞西チュリヒへ移住する事となつた。此時ビルロートは31歳であつた。

當時師なるランゲンベツク教授が「外科學寶函」を發行したのはビルロートが瑞西に行つてから後1ケ年の事であり、又あのセンメルワイスが産褥熱に就いて狂人になる程努力奮闘した時代であり、又獨逸にあ

つてはウキルヒヨウがあゝの有名なる「腫瘍論」を發表した時代であつて、我朝に於ては文久2年に當り蘭醫ポルトウキンが來朝した時であつた。即ち昭和14年を遡る事實に78年前の事である。

ビルロートのチュリヒ大學在職は前後7ケ年であつたが、ビルロートはチュリヒ大學に於て2, 3の親友を得たとは云へ専門の外科上の活動はあまり目覺しいものではなかつたし、且ビルロートもチュリヒ大學にはあまり好感を持つてゐなかつたし、又特に此時分に妻あり子があつたがために、家庭の人の病氣やら又不幸に遭遇した事などからあまり愉快的な生活ではなかつたらしかつた。然し此時分にはビルロートの音楽特にピアノに對する趣味が再び燃え上つてきて分不相應のピアノを買ふて嬉しがつてゐる。然し一方には著述に従事してあの

Handbuch der allgemeinen und speciellen Chirurgie. 4 Bd. (1865-1882)

と云ふ17年もかゝつて完成した4巻の大外科書に筆を走らせてゐた。結局ビルロートのチュリヒ生活は其雌伏時代とも云へる。此時代には獨逸に於てはランゲンベツクありエスマルヒありフォルマンありチーアシユ等あり、そして1875年シンプソンによるクロ、ホルムの麻醉法の發明と其普及等々によりて歐洲に於ける醫學、醫術の勃興時代がはじまつた。それは我が朝に於ては明治の始期から明治10年頃の間であつて獨逸醫學の輸入の初期であつた。ビルロートのウキン大學に於ける生涯は前後27年であつた。そして此27年間に於けるビルロートの活動振りには頗る目覺しいものであつて醫學に醫術にそして醫政にそして音樂に多忙多端を極めてゐて歐洲に於ては押しも押されぬ外科學上の重鎮であつた。然しウキン大學に於ける獨逸人として一の異分子とされ乍らそれもで最大の名譽と尊敬を受けてゐたのであつた。是等の事實は次に來る「ビルロート書簡集から飛び飛びに」に現はれて來るが、「俺は獨逸人だ」と叫びて何かよい位置でもあれば獨逸へ歸りたいとの希望はいつも抱きながら、義務と責任と位置と榮譽が之れを阻んで終生ウイン大學教授として活動した事になつた次第である。特に好める音樂の道は當時ウキンが歐洲第一とせられて多數の有名なる音樂家の去來の都であつたが故に田舎臭き獨逸へ立戻する事は心には希望して居らなかつたであらうと思ふ。ビルロートの豪華生活の最中には政府は特にビルロート驛を設けて音樂家の往來の便を計つた位だからすばらしい勢力があつたに相違ない。然しビルロートの晩年はあまり香しくなかつた。それは豪華生活のために浪費が多くなりたるためと且病院組織改善のために、看護婦養成所やら其附屬病院設立のために少からぬ私財を投げ出した爲めに、其豪華生活も權花一朝の夢と化して宏莊な別莊を賣り出すやら借財が出来るやら宿痼の心臟病の増悪やら何やら彼やらの爲めに、頗るメランコリー症になり又大いに感傷的な人間となつて黒海海岸のアバシアに療養中死んだ。行年35歳。頃は西曆1894年にして我が朝の明治27年に相當する。

樂岡子！これがビルロートの一代記であるが、三塚老先生(註。猪子名譽教授)がウキンに於てビルロート氏を見られたのは明治26年と聞いてゐるが、その時は丁度ビルロート氏の

64歳の時であつて、死に先立つ事僅に1年、昭和14年を遡る事、實に43年前の事であつた。
『ビルロート書簡集から飛び飛びに』を書かんとしてこんな無益な長々しい緒言となつた。

Wiener klinische Wochenschrift

unter ständiger Mitwirkung der Herren Professoren Dr.

E. Albert, G. Braun, V. R. v. Ebner, S. Exner, M. Graber, E. R. v. Holmann,
R. Freih. v. Krafft-Ebing, C. Toldt, A. Vogl, H. Widerhofer, E. Zuckerkandl

begründet von weil Hofrath Prof. II. v. Bamberger
herausgegeben von

Rudolf Chrobak, Ernst Fuchs, Ernst Ludwig, Edmund Neusser,
L. R. v. Schrötter und Anton Weichselbaum.

Organ der k. k. Gesellschaft der Aerzte in Wien.

Redigirt von Dr. Gustav Riehl. (Telephon Nr. 7200.)

Verlag von Wilhelm Braumüller, k. u. k. Hof- und Universitäts-Buchhändler, I. Graben 71, Wien, Telephon Nr. 6944.

Die Wiener klinische Wochenschrift erscheint jeden Donnerstag im Ganzen von mindestens zwei Bogen Grossquart.
Zuschriften für die Redaktion sind zu richten an Dr. Gustav Riehl, I. Hofstrasse Nr. 19, Bestellungen und Abonnements sind in jeder Buchhandlung.

Abonnementpreis jährlich 10 R. = 50 Mark.
Abonnements und Inseratsaufträge für das laufende Jahr werden von allen Buchhandlungen u. Postämtern, so wie auch von der Verlagsabteilung übernommen.
Abonnements, deren Abrechnung nicht erfolgt ist, gelten als erpörrt.
Insertate werden mit 30 Kr. = 60 Pfg. pro Zeptilige Nummernzeile berechnet.
Anzeigen sind nach dem üblichen Tarif zu begeben.

VII. Jahrgang.

Wien, 22. Februar 1894.

Inhalt: Gedenkrede auf weiland Theodor Billroth. Von Hofrath Professor Albert. — Ueber die Mithridate von Dr. L. A. Nékán. — Die Glykosurie und ihre Beziehungen zum Diabetes. Von Dr. Alois von Ueber das medicinale Unterrichts-wesen. Von R. Stricker. (II. Artikel) — Verhandlungen und Vereins-Officielles Protokoll der k. k. Gesellschaft der Aerzte in Wien. — Verhandlungen des physikalischen Vereins der k. u. k. Militärärzte der Garnison Wien. — Verein für Innere Medicin in Berlin. — Naturforscherversammlungen. Aus der Jahres-Versammlung der British-Medical Association in Newcastle. Thum, Fritz Ebner. Schelmppfug: H. Fröhlich. — Klinische und therapeutische Mittheilungen. Buchverletzung. Notes on appendicitis. K. Gakuzi. Stenocoma e batteraria nelle occlusioni intestinali. — Notizen. — Alle Rechte vorbehalten.



Gedenkrede auf weiland Theodor Billroth.

Gedächtnisrede des k. k. Gesellschaft der Aerzte in Wien am 16. Februar 1894.
Von Hofrath Professor Albert.
Hochschuleinliche Versammlung.

wie wenigen unter den Sterblichen selbst waren auch dann gnädig, treten durfte; Billroth's Sterblichkeit. Wer von der menschlichen Existenz so glänzende, an immerwährender Bitterkeit so reiche, Leben überblickt, der muss wohl zugeben, dass dasjenige,

ビルロート書簡集から飛び飛びに

大學時代

1. 在ゲツチンゲン, バウム教授に宛てゝ。

[1851年 嘉永4年 (伯林より 22歳)]

註。バウム教授は最初グライフスワルト大學外科教授であり後ゲツチンゲン大學外科へ轉任した人であつて、ビルロートを中學生時代から特別に好愛してゐたらしくバウム教授のゲツチンゲン大學轉任と同時にビルロートも亦ゲツチンゲン大學へ轉校した。そして居る事1年にしてビルロートは伯林大學に轉校した。

『……私の伯林大學へ轉校出来たのは全く祖母の好意ある補助金が得られたからであります。伯林では私は先づシエンライン教授 (有名な内科教授 Schönlein) の内科学とランゲンベック教授 (Prof. Langenbeck) の外科学の講義を聴講してゐますが、此様子では將來醫者となる修養としてはあまり得る所が少ない様に思はれます。それは成程こんな大病院の臨床科では多數の病人は観られますがそれだけで其病人の経過も治療なども少しも教へてはくれないからです。』

Billroth 年表

西暦	西洋醫史略	西洋社會史略	日本暦	昭和14年を遡ること	日本醫史略併社會史略
1810	Langenbeck 生 ○Hahnemann 『ホメオパシー醫學』を唱ふ		文化 7年	128年前	○海上隨鸕京都にて蘭學を唱ふ ○小野蘭山歿す
1812		○ナポレオン魯國遠征	文化 9年	127年前	
1813	○Mesmer 歿す		文化10年	126年前	
1817			文化14年	122年前	○俳優澤村田之助脱疽症の爲め横濱に於てヘボンに依り下肢切斷術を受く
1818	○Semmelweiss 生 (1818-1865)				
1821	•	○ナポレオン一世歿す	文政 4年	115年前	○地理學者伊能忠敬歿す
1822	○Pasteur 生		文政 5年	114年前	... { ○盲學者塙保己一歿す ○佐藤泰然長崎に於て蘭醫ニーマンに外科を學ぶ ○獨逸人 Siebold 蘭醫となりて長崎來朝
1823	○Esmarch 生 ○Jenner 死		文政 6年	113年前	○外科醫華岡青洲歿(70歳)
1825					
1827	○Lister 生 (1827-1912)		文政10年		
1829	Billroth 生 (1829-1894)		文政12年	110年前	○Siebold 歸國を命ぜらる
1830	○Volkmann 生 (1830-1877)				
1834	○B. の父56歳で歿す。B. 6歳の時				
1835	Billroth 母と共に Greifswald 市に移住す。此時 B. 7歳		天保 6年	104年前	○大鹽平八郎亂
1837	○Hufeland 歿	○ナポレオン三世帝位に即く	天保 7年	103年前	
1839	○Schwann				
1840					
1841	○Rokytansky 死		天保10年		

1842	○Langenbeck, Kiel 大學教授				
1843	Billroth 中學在學12ヶ年		天保12年		
1844					
1845	○エーテル麻酔應用 (Jackson-Edinburg)		天保14年	94年前	○洋方醫小森挑塙始めて宮廷に入る ○佐藤泰然順天堂病院を佐倉に開く 此時代に外科醫として下の諸流あり { 栗崎流, 西流, 猶林流 吉雄流, 華岡流
1846					
1847	○クロ、ホルム麻酔 (Simpson)		嘉永元年	91年前	
1848	Billroth 中學卒業 (19歳) ○Langenbeck 伯林大學外科教授(1847-1882) (37歳-72歳)			91年前	
1849	Billroth, Greifswald 大學入學(20歳)		嘉永 3年	90年前	
1850	Billroth, Gottigen 醫科入學(21歳の時)		嘉永 4年	89年前	○蘭醫モーニケ始めて痘種を輸入す(不惑)
1851	Billroth <u>ベルリン</u> 大學轉校(22歳), 此時母を失ふ		嘉永 6年	88年前	○ペルリ浦賀來航 ○蘭醫モーニケ始め (Laenneck 發明(1819)) て聴診器を輸入す (より34年後の事)
1852			嘉永 5年	87年前	
1853	Billroth, Langenbeck の副手となる。此時 L. は43歳, B. は25歳 ○Pravatz 皮下注射を發明す		嘉永 4年	86年前	
1854		○クリミア戦争		85年前	
1855					
1856	Billroth 伯林大學講師となる。 (外科及ビ病理解剖) 此時 B. 28歳 allgemeine Pathologie und Therapie を著す		安政 3年		
1858	○Darwin 進化論を著す		安政 3年	82年前	
1859	Billroth, Zürich 大學外科教授となる。此時31歳 ○Schopenhauer 死		安政 6年	81年前	○蘭醫ボンベイ來朝
1860	○Langenbeck, Arcliv für klin. Chirurgie を發行す	○日普條約成	萬延元年	80年前	○猪子先生誕生

1861	○Semmelweis, Prophylaxis des Kindbett- fieber を發表す ○Virchow, Gescwülstlehre を發表す		文久元年	79年前	○ポンペイ日本に於て始めてクロ、ホルムを使用 す
1862			文久 2年	78年前	○蘭醫ポルトウキン來朝
1863	Billroth, Handbuch d. allgem. und speciellen Chirurgie. 4 Bd. (1865-1882) に著手す	○ビスマルク普魯西亞 首相となる	元治元年	76年前	○伊藤隼三先生誕生
1864	○Simon 始めて腎摘出を行ふ				
1865	○Lister 始めて石炭酸を防腐劑に應用す。 (此時 L. 38歳) ○Semmelweis 死				
1866	○Thiersch 始めて Lister 法によりて防腐外 科を行ふ				
1867	Billroth, <u>ウキン</u> 大學外科教授となる(此時38歳) ○Volkman, Halle 大學外科教授となる	○獨逸戦争	慶應 3年	72年前	
1869					○大村益次郎遭難, 大阪に於てポルトウキンによ りて下肢切斷を受く。9月23日遭難, 10月2日 手術, 10月5日死
1870		○獨佛戦争	明治 3年	69年前	○エルメレンス大阪に来る ○ミュレル, ホフマン東京に来る
1871	Billroth 42歳 志願軍醫 (freiwillige Hülfverein) 救助班長 として Rhein に出張す		明治 4年	68年前	○ヨオンケル, レーマン京都に来る
1872	○Kolbe, Salizylsäure を發明す		明治 5年		○佐藤舜海歿
1873	○Thiersch, Über Ersatz der Karbolsäure durch Salizylsäure		明治 6年	63年前	
1874			明治 7年		
1875	○Koch, Untersuchung über die Aetiologie der Wundkrankheiten.		明治 8年	61年前	○Schulze 東京に於て始めて Lister 防腐術を行ふ
1876			明治 9年	60年前	○Baelz 東京に来る
1877			明治10年	59年前	○Scheub 京都に来る
1878					

1879	○Langenbeck Deutsche Gesellschaft für Chirurgieを設立す	明治13年	56年前	○佐藤進ビルロート外科通論を譯す	
1880	Billroth 一般看護學を著す (此時50歳)	明治13年		○Scheube 歸國 ○Schulze 歸國 Scriba 来る	
1881	Billroth, Über die Anwendung der Antiseptis bei Laparotomie Magenresektion B. 52歳	明治14年			
1882	○Langebeck, 教職を去る。72歳 Billroth, 伯林招聘を斷る	明治15年		○猪子先生京都に来る (此時23歳) ○石黒忠憲 エスマルと軍陣外科を譯す ○足立寛 ヒュテル外科通論を譯す	
1883	Billroth, Handbuch d. allgem. und speciellen Chirurgie 完成 (53歳) ○Koch, 結核菌發見	明治17年	55年前		
1884	○Koch, コレラ菌發見	明治18年	54年前	○猪子先生, Laparotomie に antiseptische Methode を用ゆ ○大森, 池田(福岡)始めて帝王切開術を行ふ	齋
1887	Billroth 肺炎に罹る	明治20年	52年前	○此時代より aseptische Methode 行はる	
1888	○Langenbeck 死 (77歳)				
1889	○Volkman 死 (59歳)	明治22年	50年前	伊藤隼三先生東京醫科大學卒業	齋
1893		明治26年	43年前	猪子先生渡獨ウキンにて Billroth と會見	
1894	Billroth, Abbaziaに療養中歿(2月6日), 行年65歳	明治27年	45年前	日清戰爭	
1895	○Thiersch 歿。72歳 ○Pasteur 歿。73歳	明治28年	44年前	同	

抜 萃

Billroth 生 110年前, 文政2年
 Billroth 死 42年前, 明治27年
 Billroth は師 Langebeck より20歳若し
 Billroth, Langenbeck の助手となる。83年前, 安政3年, 28歳の時
 Billroth は Esmarch より6年若し

Billroth は Lister より3年若し
 Billroth は Zürich 大學外科教授。萬延元年, 72年前, 38歳の時
 Billroth, Wien 大學外科教授。明治3年
 Billroth, Wien 大學教職にあること25ヶ年

樂岡子！洋の東西を問はず大學の臨床科の講義とか云ふものは今日も昔時も同じである。そして學生は唯だ茫然として4ヶ年を経過するだけである。それから副手ともなり助手ともなつて初めて醫學と醫術を體驗によりて知る事ではあるまいか。ゲツチンゲンの田舎大學から伯林へ出て來たビルロートが其舊師に向つてこんな感想を洩らしてゐるのも不思議ではない。

『……臨床講義は内科のシエンライン (Schönlein) 外科のランゲンベツク教授について修學してゐます。……煎する所私は當伯林大學にある間は多くそして種々なる人間の疾病を觀るだけであります。又ドクトル、トラウベ先生の打診法及び聴診法の實習とラインハート先生の病理解剖學を學んでゐます。私は是等の教授に就て別に生意氣な批評は申しませんが、其中シエンライン教授の内科講義が大いに気に入りました。そしてランゲンベツク教授の手術の手際を觀てゐますと詳細には説明もせず唯だ手取早くメスを振つてゐるだけの事です。現に數日前に乳房の再發性腫瘍の手術がありました、それが如何なる種類の腫瘍であるのか少しも説明してくれませんでした。此所では凡ての外科疾患を或は肥厚 (Hypertrophie) とか或は退化現象 (Degeneration) だと云ふ事の説明で片づけてゐる様です。』

樂岡子！これがビルロートの臨床第1學期の時の感想である。Studiosus から Candidatus の學生に進んだ黄口生のビルロートが外科の大家ランゲンベツクを評してゐるのも面白い。蓋しクロロホルムがシンプソンによりて初めて麻酔に應用せられたのは1847年であるから、此時分は既にクロロホルムの應用をやつてゐたか知らないが、少なくとも當時の外科醫はまるで手品師の様なものであつて、唯だ瞬速に手術をしてしまつたのであつて、特にランゲンベツクは其電光石火的の手際で有名であつたらしく、ある時ある傍觀の醫者が眼鏡をはずして又かけてゐる間に1本の脚が切つて落されてしまつたのでどうして切つたのか解らなかつたと云ふ話もある。今日から見ればウソの様な話だが當時の外科の手術は凡て電光石火流が尊ばれたらしい。こんな餘談はさて置きビルロートは伯林大學ではあまり醫學には專念して居らず、不相變持つて生れた音樂に熱中してゐたらしいのは母なる人に書いた頗る長文の手紙が1通遺つてゐるが終始音樂談であつて學業の事、經濟の事などは少しも書いてないので解かる。

大學卒業後遊學時代

24歳にして兎も角も伯林大學を卒業したビルロートは短日月ではあつたが諸國遊學の途に上つた。佛蘭西、伊太利亞諸國を旅行して廻つた。勿論これは祖母の補助があつたためである。

2. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1853年 嘉永6年 (巴里より 24歳)]

『……私は巴里で生物學會を傍聴しました。此會は何分生物學一般の種々な論題の集合所で

ありますが傍聴はしましたものの何が何やら少しも解りませんでした。……此生物學會は創立後既に48年も経過してゐますが全く統一がなく化學あり理學あり醫學あり動物學あり植物學ありで、多數の演題と多數の演説者が入り代り立ち代り勝手々々にしかも得意氣に演説をするだけで聴衆は唯だ囂々として眞面目に聴いて居りません様子です。又聴いてゐる人々は理解せないと考へられる位でした。』

樂岡子！獨逸にも昔時から自然科學及び醫學會と云ふ一結合體があるが、これは創立當時に於ては必要なものであつたゞらうが今日に於ては唯だ一種の懇親會と御祭騒ぎに過ぎない。茲に於てか今日では洋の東西を問はず分科會の其又分科會その又分科等々に分離して來た。然し又あまりに分科分科又分科になつてしまつたではないか。醫學は進歩すればするだけ複雑になつてくるのは止むを得ない潮流であるまいか。

『私は Deonville 教授の直腸癌剔除の手術を見ました。同教授の手術に際し冷靜な事及び「見てくれ」的でなく又自分が佛蘭西人であるかさへ忘れてゐるかの態度にはすつかり感心しました。巴里には多くの獨逸の醫者の留學生も居ります。Dr. Pitha も居りましたが何れも其手際のよいに感心してゐた様でした。それから D 教授のクロロホルムの麻痺作用の事に就いての講義がありましてクロロホルムは將來大いに應用すべきものだと云ふてゐました…』

3. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1856年 安政3年 (伯林より 27歳)]

此時ビルロートは伯林醫科大學ランゲンベック外科の私講師となつた時代である。

『……ウキルヒヨウの伯林大學への招聘は學問上實に慶賀すべき事ではありますが、ウキルヒヨウの政治上の主義がプロシヤ政府の主義と反對であるのと、又大學の經費の都合で手取早く涉らないのですが、他方面では私を病理學の講師にしようかと云ふ話もある様ですが私はどうしても外科をやつて行きたいと思ひます。』

『……私は當學期には兼務として病理解剖學と顯微鏡學の講座を擔任さゝれました。其他勿論本職として外科總論の講義はやつてゐますが聴講生は僅かに10人乃至12人でありますから収入としては甚だ貧弱ではあります但し學生は眞面目に聴いてくれてゐます。……』

4. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1856年 安政3年 (伯林より 27歳)]

『……ウキルヒヨウはとうど伯林へ招聘されました。そして病理解剖學を2學期に分ちて講義してゐます。私が學生から聞いた事ですがウキルヒヨウの講義は初學生にはとても六ヶ敷過ぎて解りにくいと云ふ事です。だからウキルヒヨウの講義を理解しようと思ふなら1, 2學期位では駄目だと云ふ事でもあります。勿論ウキルヒヨウは多くの學生を引きつけるだけの大なる學識を持つてゐるのは確かですが、學識の多いのと大學教授として學生を教授すると云

ふ事は大いに違つてゐると云ふ先生の豫ね豫ねの御説には賛成であります。……』

樂岡子！ 若いビルロートのウキルヒヨウを評する言葉は甚だ面白いと思ふ。それに就て老ト庵は無益な昔時の夢を思ひ出す。それは若き日のト庵がライプチヒを去つて伯林へ乗込んだ時の目的はまづ第一にウキルヒヨウであつた。當時ウキルヒヨウは既に70餘歳の老人であつた。そして若き日のト庵は雲霞の如き満月の大講堂の正面に小さくなつてウキルヒヨウ大先生の出講を今や遅しと待ち構へてゐると矮小粗衣の田舎のお爺殿が壇上に上つたのにまづ驚いた。そしてポケットから評判のハンカチーフである赤い風呂敷様のものを引っぱり出してまづ鼻をかんだ。そして細い眼を尖らして金縁眼鏡越しに全講堂を見上げ見下し乍ら病理學總論を講義し始めたのであつた。然るに聲は低いし云ふ事が解らない。病理學の講義やら自然科學の概論やら哲學の議論やら何が何やら何所を捉へてよいのやら解らない。大風呂敷を擴げて説き去り説き來るのに啞然として1時間半と云ふものは、唯だ此有名なるしかし田舎のお爺殿の顔を見守つてゐた事だけであつたのを記憶する。それでビルロートのウキルヒヨウの批評には賛成する次第である。其時ト庵はウキルヒヨウの供覽實習科にも出入したし病理解剖も見たし、又ウキルヒヨウ翁の私宅の客となる光榮にも浴したし、又大ウキルヒヨウの長子であり且普通解剖學教授であつたハンス・ウキルヒヨウにも知遇を得て引きづり廻された事があつたのでウキルヒヨウの思ひ出記⁷を書いて先考五洋先生(註。故藤浪鑑名譽教授)に捧げた事もあつたが、其記事も亦教室と共に灰となつてしもうた事を思ひ出す。之れは餘談であるがト庵の樂しき夢の思ひ出である。

『……それから先生……私の友人は醫科大學卒業後は少くも10學期即ち5年は續けて研究しないと駄目だと申しますが、私の家情がそれを許しませんので精々4ヶ年で打ち切らねばなりません。……』

『……目下私はウキルヒヨウの炎症論を読んでゐますがその全部には賛成し兼ねます。先生はそれに就て如何御考へでありますか御教示を願ふ次第であります。……』

5. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1856年 嘉永3年 (伯林より 27歳)]

『……ランゲンベック教授はシェンライン教授の勸告によりて暫時療養に出掛けておりましたが、全く回復して伯林へ歸つてきました。そして以前の通り元氣です。そして病室の廻診時には前後3時間は間斷なく次から次へと飛び廻つて我々助手共を驚かしてゐます。恐ろしい精力家であります。』

『……私は目下組織學を熱心に勉強してゐますがこんな學問研究は中止してこんな蝸生活から脱出しなければならないとあせつてゐます。……』

樂岡子……學究者の蛹生活時代は苦痛と煩悶の連鎖である。纏ては脱皮又脱皮して碧空に飛上る前程であるから 實は人生の一番大事な時代とも云へる。だから此蛹時代は殻の中にあつて不平の氣分が充滿してゐるが、實は將來の飛躍の原動力の蓄電池であるまいか！

6. 在ゲツチンゲン、パウム教授に宛てゝ。

[1857年 嘉永4年 (伯林より 28歳)]

『……先生私は昨年夏期から専ら組織學研究に従事して参りましたが急に顯微鏡から遠ざかりました。それと云ふのはランゲンベック教授の助言によりて死體が得られる様になりましたので學生の爲めに手術方式實習をやつて行こうと思ひます。その方が顯微鏡に「かぢり」つて始末のつかない研究をしてゐるよりは面白いと思ひます。そして之が爲めに外科學上の文籍も手に取る事が出來ますし又之によりて心の安定も求められる様になると思ひます。…』

樂岡子！ 之がビルロートの實地外科に飛び込んだ第1階梯となつた譯である。そしてビルロートは死體を切つて手術方式實習を學生に教へてゐる方が、黙々として鏡下無限大の世界に逍遙してゐる方よりは遙かに好きであつたに相違ない。蓋しビルロートは將來實際外科の大手術家たるべき核を多分に包擁してゐた人であつたのだらうと思ふ。

7. 在ゲツチンゲン、パウム教授に宛てゝ。

[1857年 安政4年 (伯林より 28歳)]

『……先生！ 悪く思はないで下さい！ 實は私は先生に折入つて御依頼致したいのですが、ワグナーが今度ダンチヒ市立病院をやめてケーニヒスベルヒ大學外科教授として行く様に承りましたが、其爲めにダンチヒに上級醫員が1名補缺される事となりました。私は大學の學究的道程を歩む事を斷念して補缺の一員となつて實地外科醫をやつて行きたいと思ひます。依つて甚だ御無理の御願ひでありますが無卒先生の御力添へを願つて同病院の評議會へ私を御推薦願ひたいのであります。實は其評議員には先生の御存知の某氏々々等が居られますから先生が1, 2行の御手紙さへ送つて下されば充分だと思ひます。實際伯林大學の内部の葛藤はそれはそれは言語同斷であります。勿論研究材料は豊富ではありますが無生の如きものとはとも將來向上の見込はないと思ひます。……』

樂岡子！ 若い日のビルロートの悩みの如きは昔時も今日も同じであるまいか！ そして大學内部の事情も亦昔時も今日も同じであるまいか！ 葛藤と葛藤、そしてパンの問題は昔時も今日も同じであり將來に於ても同じであるだらう！ と考へる。

8. 在ゲツチンゲン、パウム教授に宛てゝ。

[1857年 安政4年 (伯林より 28歳)]

『……先生！ 先日御依頼申上げましたダンチヒ病院の補缺の爲めの先生の推薦狀はたしかに

同病院評議員會へ到着しました様に承りました。御好意に對して感謝致します。然し私の競争者はドクトルグルト(Dr. Gurlt)である様ですがさて誰に富籤が當りますやら？ それにグルトの他にハイフェルドも有力な候補者であると聞きました。當分私は不安で堪りません……』

樂岡子！ 曰く評議員、曰く教授會、曰く推薦、曰く多數決等々世の中はうるさいものである。そして唯一票の差が人の一生の運命を定めると云ふ事は妙なものであるまいか。多數決がよいのか少數決がよいのか、ナチス主義がよいのか民主主義がよいのか知らないが、一村、一町、一都市、一國、一民族等々人間の集團と云ふものには葛藤がつきものであつて優勝劣敗は自然の法則ではある。

9. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1857年 安政5年 (伯林より 28歳)]

『……先生！ 私が希望しておりましたダンチヒ病院の外科醫の位置は、とうどスチツヒとポール (Dr. Stich, Dr. Pohl) にしてやられました。仕方がありません。唯だそれに就ての先生の御好意に對して感謝します。だがランゲンベツク教授は私に對しては頗る好意を持つてゐてくれますので當分は現在の位置に留つて勉強する心算であります。が實際の所を申上げますと私の現在の位置は周囲の事情から見ますと甚だ不安定な位置でありますので心細い次第であります。……』

樂岡子！ ビルロートは落選したのであつた。だが若しもその時に當選してダンチヒと云ふ(當時獨逸の自由港ではある)獨逸の東北隅の田舎町の一小病院にくすぼる事となつたとしたら或は後日大家となれなかつたかも知れない。運命と云ふものは妙なものである。天の命令だとも云へる。神の導きだとも云へる。佛の加護だとも云へる。偶然だとも云へる。唯だ奇妙なものであるまいか。

『……先生！ 私は「病理組織學の補遺」と云ふ小業を公にしました。これはウキルヒヨウの細胞病理學にも觸れておますが、どうも病體に於ける自然的作業より起る微細なる形態の變化だけによりて凡てを判斷すると云ふ事は中々不可能だと私は思つておます。そしてその方面の觀察も決して不必要だとは考へて居りませんが、私は此顯微鏡下の觀察よりは臨床的實地の觀察の方が好きでありますし又より以上に必要だと思ひます。……』

樂岡子！ 之がビルロートの愈々象牙の塔からぼつぼつ出て來た姿である。

10. 在バーゼル大學ヒス教授に宛てゝ。

[1857年 安政4年 (伯林より 28歳)]

註。Prof. His はビルロートの親しき友人であり、解剖學者であつた。後年ライプツヒ大學の解剖學教授に轉じライプツヒ外科大學の外科教授チーアシュと前後して死んだ人である。

『……拙者は目下外科學總論の講義をやつてゐるが豫想外に聽講生が多いのに驚いてゐる位

だ。そして此外に手術方式實習と局所解剖も教へてゐるし、又2時間も手術室で外科の仕事をやつてゐるので中々多忙だ。だから顯微鏡組織學はやめて了ふた。然しだ、實際の所は何時迄拙者が今日の位置に居られるものか否やが問題なのだから甚だ不安定の職務と云ふものだ。それにパンの問題があるから一層不安なのだ。……』

樂岡子！ビルロートは一方では職務に忙がしく居り乍ら他方では其位置の不安定とパンの問題に苦慮してゐた事が解る。若い醫學者の悩みは東も西も昔時も今日も同じであるまいか？！

11. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1858年 安政5年 (伯林より 29歳)]

『……先生！近頃私がグライフスワルト大學病理學教室へ招聘せられる様な評判のある事を聞きましたがこれは實際少々考へ物であります。それと申しますのは月給の點であります。若しも左様になりますと私の今日の収入に比すると大いに不利でありますし且又私は純病理學にはあまり大なる趣味を持つて居らない爲めであります。だから私としてはあまり喜んで居らないのであります。……近頃私は餘暇を利用して眼科のグレーフェ教授 (Prof. Graefe) の教室へ行つて眼科學を學んでゐますが之によりて私の眼科學の智識が頗る少なかつた事に氣がついて驚きました。然し此眼科教室への通學によりて先達ダンチヒ病院への轉任の失敗の代償となつたと考へて慰めてゐる次第であります。……』

12. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1858年 安政5年 (伯林より 29歳)]

註。此時分にビルロートは將來外科で立つて行こうと決心したらしく外科學上の研究に専念してゐたが此時は獨逸國に於てはあの鐵血宰相ビスマルクが普魯西王國の首相となつた時代であつた。

『……先生！近頃先生の御門弟であるザクセル氏 (Dr. Saxer) の書いた氣管切開術の報告を読みました。その手術の主眼な點は嘗つて先生が云はれました事がありまして私も同感であります。又ピタ氏 (Dr. Pitha) が考案したと云ふ特別な氣管切開刀が世間では大いに評判になつてゐますが私は何時も普通の「メス」で手術をしてゐます。ランゲンベツク教授は氣管切開に就て約50例も持つてゐますが其中たつた2例だけが良結果を得てゐるだけで其他は皆不成功でありました。然しそれでも私は此手術を決して放擲せずには繼續して行く心算であります。實際の處伯林ではランゲンベツク教授以外の人は此種の手術をやつて居りません様ですが、それは適當なる病例がないのと其手術の結果が大部分不良であるが爲めに其失敗を恐れてゐるが爲めであります。』

『……先生！近頃私の講義には20人程の聽講生があるやうになりました。そして私は目下骨折と脱臼と口腔外科に就て講義をしてゐます。それで差當り満足してゐます。……當大學の最

も悪い習慣は私達の同僚達が僅かに4週間や6週間の課外講義をして不勉強な學生の卒業試験の準備に随分高い金をとつてゐる事でもあります。そして先生！私はランゲンベック外科教室外來部の助手も兼務してゐますが考へて見ますと私は今年で丁度足かけ6ケ年間大學生生活をしてゐる事になりますが、私の内職(Privatpraxis)の行無と其多少が私一家の生活費に大なる關係となるのですが、伯林市内の外科醫にウキルムスとアンケルスタインと云ふ流行醫が居りますので大抵の外科患者はその方へ行きますから其領分に割り込んで行くと云ふ事はとても駄目でありますし、又ランゲンベック教授は主に外國の富豪相手の仕事が多いのですから市内の外科醫から商議醫として招待しても中々行つてくれませんし、又其商議を求めても其來診の時間が恐ろしく不正確であるのであまり評判はよくありません。……』

樂岡子！流行家の商議醫の時計は何時も1,2時間は遅れてゐるものである事を覺悟してかゝらなければならない。否時によると之が一種の兵法とする人もないではないと思ふ。

13. 在マクデブルヒ、ドクトル、フオクに宛てゝ。

[1858年 安政5年 (伯林より 29歳)]

註。ドクトルフオクと云ふ人はビルロートの親友であつた。そしてビルロートは丁度、結婚式をすました時であつたらしい。

『……8月20日に拙者は結婚式を済ませたよ。だから拙者は乍憚最早獨身者ではないよ……ランゲンベック教授の下にあつて助手としての拙者の職務は來年の11月1日までは安定するらしいが、さて其以後如何なる事か解らないので甚だ不安でもあると云ふものだ。それから此地に於て拙者の内職(Privatpraxis)は殆んど皆無と云ふてもよい位だから生活上甚だこまつてゐる始末だ。そして手術方式實習の講義料で生きてゐると云ふてもよいが實習生が僅かに10人乃至12人しかないので全く以てやり切れないよ！そして一家の御主人公となつて妻があると云ふものだから困るではないか。……』

樂岡子！之が5年、6年と孜々々々として勉強し乍ら、然も有名なる師匠の下にあつて伯林大學の外科の助手兼講師たる B. 君の生活苦の姿である。

14. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1859年 安政6年 (伯林より 30歳)]

註。此時分に歐洲にあつてはサルヂニアと佛蘭西の聯合軍と奧太利亞軍との開戦の初期であつた。獨逸國も戦闘準備をしてゐたらしい。

『……先生！當地では日下戦争は避くべからざる事だと云ふてゐます。之故に何處でも戦争の準備に關係のない家庭はない様であります。それは諸工場の職工の4分の1は戦場へ送り出される事となるらしいですが其家族共は一體如何なります事でせうか？餓死するより仕方がないです。然し一般の民衆は政府に信頼してゐる様ですから國家の爲めの犠牲の覺悟はし

てゐる様です。勿論若い獨身者の醫者達は出征を大いに喜んでゐる様ですが、我々仲間の同僚達は動員の曉には家族の者を如何してよいか心の中では大いに心配してゐます。我々普魯亞國民は之迄種々な苦難に堪へて來たのですから今後共苦難に堪へられると思ひます。私は佛蘭西皇帝（ナポレオン三世の事）を惡まねばなりません。大學では外國の留學生は危險を恐れて急いで歸國しましたから其姿は見えませんが獨逸の學生は割合に平氣で講義に出席してゐます。だが次學期にはどうなりますやら……』

15. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1859年 文政6年（伯林より 30歳）]

『……先生！今日私は手術で大失敗を致しましたので鬱いでゐます。それはヘルニアの手術でしたが4日前に箝頭した1例でありまして既に腹膜炎が起つてゐたのですが、私は Cooper 式により直接にヘルニア嚢を切開せず、唯だ股溝部を擴張して見ましたが、整復がどうしても出来ずに失敗に終りましたのでした。あの Wilms は 200 例のヘルニア治療例を報告してゐる程ですがそれでもまだ不満足な結果が多い様です。實は私のクリニックへはヘルニア病例はあまり参りません……又稀に來る時がありまして手術の時期が遅れてゐるが爲めに手術の成績が甚だ悪いのであります。それで其事に就て先生の御経験を御教示願ひたいのであります……』

樂岡子！ 失敗の時に其師の教を乞ふてゐるビルロートの心掛けは賞すべきではあるまいか！

16. 在ケツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1859年 文政6年（伯林より 30歳）]

『……水嚢腫に對してクロロホルム注入法は當地では棄てゝ了ひました。其代りに沃度注入法に逆戻してゐますが其多くは外來患者にやつてゐます。それはクロロホルム注入法は時々非常な反應を起す事があり、又1例にそれが爲めに死の歸轉をとつた事がありました……』

『……純醫學の研究と臨床醫學に關して目下ヘンレー (Prof. Henle) とウキルヒヨウとが議論をしてゐる様ですが、私は扁桃腺の構造に就ての研究業績は既に發表してありますのに、ヘンレーはその事に就ては一字だつて書いてくれません。之は奧太利亞の政治と同じく排他主義から出てゐるのではないでせうか？ 當地ではウキルヒヨウは醫學戰の第一線に立つて奮闘してゐますが、之に對抗の出来る人はヘンレーだけであります。然し何時迄對抗出来ますやら？……』

樂岡子！ヘンレーと云ふ人は一風變つた空想家であり豫言者的人であつたらしく、後年ロバート、コホの細菌學進出の豫言者の一人であつたらしい。

17. 在ゲツチンゲン、パウム教授に宛てゝ。

〔1860年 萬延元年 (チュリヒより 31歳)〕

註。此年にビルロートは伯林大學を去りて瑞西チュリヒ大學外科教授に招聘されたが、矢張一方では生活苦に攻められ又他方では外國生活の爲めにあまり愉快ではなかつたらしい。

『……先生！本大學にての私は職務上伯林時代よりは多少面白くなりましたが何分にも生計上に私一家は之が爲めに苦しんでゐます。しかもチュリヒ大學では私が唯一の獨逸人でありますからどうも他國人である氣持があつて落ち付いた氣分になれません！又此處へ來て見れば私の妻は此地が嫌いなので不平だらけです。然し夏ともなれば此地の風光が幾何程か慰めてくれると思ふてゐます。此處の外科部には70の病床があり又外來部もありますが私を外來部には入れてくれません。又眼科部もありますので私が嘗つて伯林に居つた時にグレーフェ教授の下で眼科を修得してゐましたので多少自信はありますが眼科部へも手は出せないと云ふ始末です。此地の眼科部は1ヶ年僅かに平均20人の入院患者であります、眼病と云へば多くは結膜炎で又偶には虹彩角膜炎位なものですから少しも興味がありませんし、又此地では眼科専門の大家クラウゼン (Clusen) と云ふ開業醫が居りますからとても太刀打ちは出来ません。……』

樂岡子！私講師から教授になつたビルロートはそれでも第一に生活苦にあえいでゐる姿を見るがよい。特に感傷的なビルロートは妻の不平に大いに氣を腐らした事であらうと思ふ。そしてヤケになつてピアノのキーをたゞいてゐただらうと考へる。

18. 在バーゼル、ヒス教授に宛てゝ。

〔1861年 文久元年 (チュリヒより 32歳)〕

『……君は南方地方を旅行中だと聞いたが羨やましいなア。拙者は此7月の暑い時分に之迄になく無茶に忙がしかつたよ！多數の重症外科患者があつて其生死が拙者の責任とあるから晝夜心配の連鎖であると云ふものだ！君の専門の解剖學とは全く違ふぞ！そして近頃拙者は醫者としての智識と作業能力の頗る微弱であつて決して豪ばれるものでない事をつくづく感じたよ！それは拙者の一言一行が病人だけではなく其家族の浮沈に關する事になるのだから容易ならぬ仕事だ。……こんな悲觀的の考察からとても研究などに手を出す勇氣もなくなつたと云ふものだ。然し少しは氣晴しに一度捨てゝしまふ顕微鏡へ近寄らうかとも考へてゐる。實は拙者は君と同様に解剖學が好きであつた事は君も知つてゐただらう。……』

樂岡子！ビルロートが若しも好きな解剖學者になつたなればとても十分にパンは得られなかつたであらうし、又それが爲めにいつも妻君と喧嘩をしてゐた事だらうと考へる。然しパンの不足々々と云ふて居乍らビルロートは此時に好きな音樂の爲めに1200フランと云ふ大金を出して大ピアノを買ふてゐるが月賦拂か借金か其邊は手紙には書いてない。

19. 在マクデブルヒ、ドクトル、フオクに宛てゝ。

[1861年 文久元年 (チュリヒより 32歳)]

『……拙者は腰部の切斷手術は膝部切斷手術よりは危険が多いと思ふ。君も將來此種の手術は控へ目にするのがよいぞ。勿論各人各自の経験から其考へが定まるものだが、拙者は之迄3例腰部切斷(Hüftresektion)をやつた事があるが其中2例は成功したが1例は失敗だつた。だから拙者は近頃は理論上には可能の場合でも實際の結果の事を考へてやる事に傾いて來たよ。近頃クルツプに三度氣管切開をやつたが3人乍ら死んでしもうた。之は皆出血の爲めに窒息した爲めであつた。勿論此時は1人の助手もなく貧民窟でやつたのだつた。だからと云ふて拙者は氣管切開が嫌になつたと云ふのでない。もつと工夫をせなければならぬと考へてゐる。總じて此地では氣管切開をする場合が甚だ少ない。それから拙者は近頃随分大きな手術もやつて見たよ。それは6歳の小兒に下顎切除と骨成形術をやつたのだ。……』

『……此處では外科の手術材料は決して少なくはないので100人の手術すべき患者中30人は助手任せにして其餘りのものは拙者の臨床講義の材料にしてゐるが、其多數は外傷(工場機械等の負傷)であつて腫瘍特に癌腫の手術の病例が甚だ少ない。』

『……此地では拙者の内職(Privatpraxis)は甚だ貧弱だ。それは外部に於ける商議醫としての手術の場合も稀有であるし、又家庭診察は謝絶してゐるから拙者の収入ときたら實に情けないものだ。そして伯林に居つた時よりも収入が少ない上に此處の生活費が恐ろしく高價につくから年が年中キユキユ云ふてゐるよ!。だからなるだけ社交は避ける様にしてゐるがそれでも毎年15000フランの支出だ。然るに年俸が5000フランと云ふのだからやり切れないよ! 愚痴も出るよ!……』

樂岡子! 75年前のチュリヒ大學外科教授の生活振りはまづ斯様であつた。然し特診料などはなかつた時代であつただらうと思ふ。

20. 在キール大學エスマルヒ教授に宛てゝ。

[1861年 文久元年 (チュリヒより 32歳)]

註。エスマルヒは軍陣外科醫として有名でありピルロートより5年の年長者であつた。そして常に醫界上の意見の交換をしてゐた人であつた。

『……當大學ではリンドフライシユ(Prof. Rindfleisch)が病理學の講義を受持つてゐるが年は27歳の若さであるし、なかなか熱心な男であつて且頗る雄辯家であるから學生間には評判がよい。そして30人の聴講生と20人許りの實習生とを持つてゐるが氣の毒な事には教室が狭いのと顯微鏡の少ないのに閉口してゐるし、又最も氣の毒なのはまだ學位がないのと俸給が甚だ少額である事であつて年俸300フランではやり切れないよ!。拙者も内々其爲めに當局者に忠告してやつたが財政の關係上思ふ通り出來ないので困つてゐる。それに彼は結婚してゐる身分なのだから800フランでは實に氣の毒に堪へないと云ふものだ。こんな状態だから彼は

とても此處には長くは居られまい。それにグリチンゲルと云ふ先輩が頭を押へてゐるからなア。……』

21. 在キール大學エスマルヒ教授に宛てゝ。

[1862年 慶應2年 (チュリヒより 33歳)]

『……骨成形外科は大いに將來擴大されるべき外科の視野であると思ふ。その視野はランゲンベック教授の得意の方面だ。又造口蓋術も中々面白い外科的部門だがランゲンベック先生が何が故にあの様に躍世になつて其優先問題に乗り出して喧嘩してゐるかその譯が更に解せないのだ。蓋し其手術の方式を誰れが最初にやり始めたかと云ふことは問題ではないじやないか！それはつまり佛蘭西と獨逸との争ひと云ふものだ。實に以て下らないものだよ。そんな事はどうしてもよいでないか。……』

『……近頃寒性膿瘍の5, 6例をやつて見た。そして排液の爲めにそれに排膿管を挿入して見たが Seton の云ふ様には結果はあまり良くない！。其80パーセントの病源は確かに骨質にあるのだらうと思ふのだから之は何とか考へ直さねばならないと思ふてゐる。そんな事よりは拙者は目下疑問を抱いてゐるのは外科的流行病と云ふ事だ。こんな流行病が果してあるものか否やの問題なのじや。曰く丹毒、曰く牙齦緊急、曰く外部化膿症等々などと云ふものが果して流行性にやつて来るや否やと云ふ事だ。それに就て拙者は目下統計的に調査してゐるが君の意見を聞きたい。ウキルヒヨウも多年此事に就て研究してゐた様だが彼はエンボリー論以外には一步も進行してゐないではないか！。之は人體の血行系統との關係ではなくして淋巴系統と關係があるのではないかと拙者は考へるが君の意見は如何。……』

樂岡子！ 細菌學の芽萌さへまだまだ現出せずにセンメルライスが狂氣の様になつて産褥熱論を主張した前1年、リスター氏の消毒法が世に出た前3年の時代であつたからビルロートの疑問も止むを得なかつたが今日に於ては醫科の1年生だつて知つてゐるではないか。

22. ヒス教授に宛てゝ。

[1862年 文久2年 (チュリヒより 33歳)]

『……實際上には放開性外傷ではまだ肉芽が発生せない時には傷面が腐敗して分解され、その分解毒が體内に吸収されるから敗血症が発生するのだらうと思ふ。然し傷面が大にして且化膿してゐても其腐敗部が充分の創面に固着して居りさへすれば分解毒が内部へ吸収されないから敗血症は起らないのだ。之故に肉芽の發生するのが第一義だと思ふ。だから民間で創面に馬糞をつけたり又小便で洗つたりする事もあるが、それでも害がない事もあるから敗血症の問題はまづ肉芽の發生と否とに大なる關係があると思ふ。……』

萩原教授就任式記事

(昭和14年3月25日、於京都帝國大學醫學部外科・整形外科講堂)

副手 柏 誠治、玉貫眞幸、内藤一男 記

開式午後4時。

青柳教授ノ萩原教授紹介

『此ノ度新シク外科學第1講座ヲ擔任ニナラレマシタ萩原教授ヲ御紹介申シマス。』

青柳教授ノ萩原教授略歴紹介

『萩原教授ノ略歴ヲ御紹介申シ上げマス。教授ハ明治27年7月16日富山縣魚津町ニ生マレ當年46歳。原籍ハ金澤市高岡町上藪ノ内12デアリマス。第六高等學校ヲ經テ大正8年11月9日京大醫學部ヲ卒業シ、9年4月京大助手ニ任ゼラレ、大正11年10月下旬熊本醫專ニ教授トシテ赴任サレ高等官六等ヲ以ツテ待遇セラレマシタ。大正13年4月1日熊本醫科大學教授兼熊本醫專教授ニ補セラレ、陸シテ高等官五等ヲ以ツテ待遇サレル事トナリマシタ。次イデ14年11月26日醫學博士ノ學位授與。15年3月11日ニ歐米各國ヘ出張ヲ命ゼラレ、同年6月出發、昭和2年12月歸朝。同年11月30日陸シテ高等官四等ヲ以ツテ待遇セラレマシタ。昭和4年5月1日官立熊本醫科大學教授ニ任ゼラレ、今日ニ至ル迄眞摯ナル學徒トシテ幾多ノ門下生ヲ訓育シテ來ラレタノデアリマス。其ノ間5年5月1日ニハ高等官三等ニ、10年3月1日ニハ高等官二等ニ敍セラレ、又11年5月27日ニハ再度歐米各國ヘ出張ヲ命ゼラレテ6月出發12月歸朝ニナリマシタ。更ニ同年7月7日ニハ勳四等ニ敍セラレ瑞寶章ヲ授與セラレマシタ。ソシテ昭和14年3月20日京都帝國大學教授ニ任ゼラレタノデアリマス。以上ガ同教授ノ略歴デアリマス。』

松本信一醫學部長挨拶(登壇)

『萩原教授ガ御就任ニナラレル御目出度イ式ニ私ガ御挨拶ヲ申スノハ、光榮ノ至リデアリマス。

去年ノ暮鳥瀉教授ガ御退職ニナラレテカラ醫學部ハ大イニ寂寞ヲ感ジテ居マシタガ、今回萩原教授ガ後任トシテ來ラレマシタコトハ、眞ニ教室ノ人ハ勿論、我々同僚諸先生ハ申スニ及バズ、醫學部トシテモ、京都帝國大學トシテモ、欣快ニ耐ヘナイ次第デアリマス。

同教授ハ16年餘熊本ニ在職サレ、ソノ間尊イ御經驗ト學問トヲ積マレ、又人間トシテモ充分ナル練磨ヲ積マレマシタ。斯カル立派ナ教授ヲ我ガ醫學部ニオ迎ヘシタコトハコノ上モナイ幸ト存ジマス。

外科學教室ガ我國外科學界ノ指導ノ立場ニアルノミナラズ、世界の最高峰ニアルコトヲ思シ召シナリ、教室員ノ爲、又外科學界ノ爲、同教授ノ御指導ト御奮勵ヲ望ンデ止ミマセヌ。

時アタカモ興亞ノ春、東亞秩序ノ新建設ノ爲ニ全國民ガ緊張シテ居ル時ニ當リ、外科學教室

ノ人モ新任ノ教授ヲ迎ヘラレ、教室員ハ教授ト共ニナリ、大學ノ使命達成、大學ノ機能發揮ニ宜シク御盡力アランコトヲ望ンデ止マヌ次第デアリマス。——コレデ終リマス。』

盛新之助醫院長挨拶（登壇）

『醫院長トシテ何か申セトノコトデシタガ、學部長ノ挨拶モアルコトデス私ハ御辭退シタノデアリマスガ、〔プログラム〕ニ既ニ出テ居ルノデ是非トノコトデシタカラ一言御挨拶ヲ申シ述ベマス。

サテ萩原教授ヲ附屬醫院ノ「スタッフ」ニオ迎ヘ申シ上ゲマシタコトヲ、我々ハ衷心カラ喜ビ御同慶ニ耐ヘナイ次第デアリマス。先程御履歷ヲウケタマハリ、又學部長ノ御挨拶ニモアツタ通り、立派ナ人格アリ、學識ヲ積マレ、長イ臨床ノ御經驗ノアル、カハル立派ナ教授ヲ病院ニ迎ヘ得マシテ、病院ハサダメシー層ノ光彩ヲ發揮スル事ト存ジマス。心ノ中ヨリ同教授ニオ喜ビヲ申シ上ゲ、マタ外科及附屬醫院ノ信頼ヲ高メラレンコトヲ一言オ祈リ申シ上ゲル次第デアリマス。』

鳥瀧名譽教授挨拶（登壇）

『私ハ自分ノ後繼者トシテ熊本ノ萩原教授ガ當選シタト云フコトヲ耳ニシタ時ニ、〔先ヅ先ヅ善カツタ〕ト考ヘマシタ。萩原教授ニ就イテハ既ニ助手時代ニ、故伊藤先生ガ私ニ向ツテ「萩原ハ大學教授ニ成ルベキ人物デアル」ト申サレマシタ。其後スグ萩原博士ハ伊藤先生ノ御推薦デ熊本醫大ノ教授ヲ拜命シテ今日ニ至ツタノデアリマスガ、荒木前總長ハ私ニ向ツテ「萩原ヲ決シテ熊本カラ移動サセテハナラヌ」ト2、3回申サレマシタ。トコロガ萩原教授ガ熊本醫大ノ教授カラ今度新タニ本學教授ヲ拜命スルニ至ツタニ就イテハ、私ハ伊藤先生ノ御意志ガ生キテ働イテ居ツテ其ガ實現サレタモノデアルト信ゼザルヲ得ナイノデアリマス。

萩原教授ノ人物ノシツカリシテキル事ニ就イテハ、伊藤先生ガ20年ノ昔ニ於テ既ニ見抜カレテ居ツタノデアリマスガ、私ノ感心シテ居ルコトハ、唯ノ一度モ「熊本ニ職ヲ奉ジテキル事」ニ關シテ不平ラシイ事ヤ愚痴等ハ耳ニシタコトガ無ク、又他人ニ就イテ「世俗的ノ所謂榮達」等ヲ羨ム氣配ナドハ毛頭ナク、今日迄終始一貫育英ニ從事シテ來タコトデアリマス。コレハ凡庸ノ人ニハ出來ナイコトデアルト信ジマス。

慾ヲ申セバ、今迄ノ間ニ何か或ル1ツノ事項ニ關シテ「群ヲ抜イタ學術上ノ寄與」ヲシテ居ツタナラバ、ト思フ人ガ無イデモナカラウカト考ヘマスガ、其レハ少々無理ナ注文デハナイカト存ジマス。

萩原教授ガ熊本ニ赴任シタ當時ハ顯微鏡ガ唯1臺ヨリ無カツタトノ事デアリマス。此レハコノ頃ニナツテ始メテ萩原教授カラ承ツタ事デアツテ、私ハ吃驚シタノデアリマスガ、ソレデ萬事ガ推シテ考ヘラレマス。ソレヲ隱忍シテ黙々トシテ16年餘ノ今日マデ教室バカリデナク大學ソノモノヲモ護リ立テ、來タコトニ向ツテハ全く敬意ヲ拂ハネバナラスト存ジマス。

單科大學デハ帝國大學ト事變リ大學經營ノ費用ノ大部分ハソノ大學ノ自辦ニ待ツノデアリ

マスカラ、教授ハソノ目的ノ爲デアルトコロノ普通ノ診察治療ニ晝モ夜モマタ休暇中モ奉仕ヲ餘儀ナクサレマスカラ、學術上ノ進歩ノ爲ニ専心スル時間ガ非常ニ削減サレルノハ當然デアリマス。

然ルニ今度ハ明カニ伊藤先生ノ御意志ガ顯現サレテ、猪子・伊藤兩教授ガ基ヲ開カレタ我ガ帝國大學ノ外科學教室ニ擔當教授トシテ任命サレタコトデアリマスカラ、萩原教授ハマルデ祖國ニ歸ツテ來タ様ナ感ジデ勇往邁進スルニ相違ナイト信ジマス。停年制ガ今日ノ儘デアルナラバ停年迄ニハマダ14, 5年ハアルト考ヘマスカラ、コレダケノ歲月ガアレバ鬱然タル學派ヲ築キ上ゲル事ハ十分出來ルト思ヒマス。

私ハ御集リノ諸君ト共ニ、萩原教授ガ今後トモ充分ナル健康ニ恵マレ、教室主宰者トシテノ使命ガ遺憾ナク達成サレテ、功成リ名遂ゲテ、我ガ大學ノ誇リ亦國家ノ誇リトシテ有終ノ美ヲ濟ス様ニ心カラ念願スルモノデアリマス。』

木村廉教授挨拶（登壇）

『萩原教授ト同級デアル故カ青柳教授ヨリ何カ一言ト言ハレマシタノデ登壇シタ次第デアリマス。

鳥潟教授ノ御退官後暫ク空席デアツタ外科學第1講座ガ同級ノ萩原義雄君ニヨリミタサレタコトハ同慶ニ耐ヘズ、殊ニ同級ノ友トシテ喜ビニ耐ヘヌ次第デアリマス。

萩原君ハ實ニ偉大ナル人物デアリマス。御覽ニナル體ノ様ニ偉大ナ人物デアリマス。非常ニ包容力ノ大キイ、又頼リニスル事ノ出來ル人物デアリマス。此レハ我々同級ノ者ガ齊シク斯ク考ヘテ居リマス。故ニ同君ガ外科學講座ヲ擔當サレル時、傳統ニ輝ク大屋臺ヲ双肩ニ荷負フニ充分ナリト思ヒマス。唯同君ハ大學ヲ離レ十數年間外ニアラレタノデ、本學ノ色々ナ事ニ多少不馴レデアルコトガ考ヘラレマスカラ、此ノ點ハ外科學教室ノ同僚後輩ガ相扶ケ、外科學教室發展ノ爲ニ盡サレンコトヲオ願ヒ致シマス。尙同君ニ於カレマシテハ此ノ大學ニ赴任サレマシタカラニハ、此ノ傳統ニ輝ク外科學教室ノ爲ニ、又本醫學部ノ爲ニ、亦タ廣クハ我ガ國外科學界ノ爲ニ御奮勵アラシコトヲ祈ツテ止ミマセヌ。簡單ナガラコレヲ以テ御挨拶ノ辭ト致シマス。』

菊池武彦教授挨拶（登壇）

『今日ハ誠ニオ目出度イ日デアリマス。萩原君ニモ、陣容ヲ整ヘタ外科學教室ニモ、御祝詞ヲ呈シマス。此處ニ立ツタ私ト同君トハ、永イ間ノ友人デ、同君ノ古クカラノ人トナリヲ知ツテキル關係上御挨拶ニ引張り出サレタモノト思ヒマス。省マスルニ萩原君ハ私トハ20有7年來ノ友人デアリマス。ガ、コノ永イ交際ノ間ニ更ニ不愉快ナ思ヒ出ハアリマセヌ。ソレカト言ツテソノ間意見ガ何時デモ一致シタト言フノデハナク、意見ガ違ツタ事モアリマスガ、ソレモ一過スレバ何等ノ蟻マリモアリマセヌ。氣持ノ好イ交リ、即チ男ノ交リカト思ヒマス。之モ同君ノ德ノ至ス所ト思ヒマス。萩原君ハ、決シテ曲レナイ嘘ノ言ヘヌ、正直ナ人デアリマ

ス。ソレト同時ニ、思ヒ遣リノ人デ、モウ一度人ノ立場デ考ヘ直シテヤラウト言フ廣サノアル人デアリマス。又物事ニ熱心デ、努力ヲ惜シマズ、犠牲的デアリ、又責任ヲ重ンズルト言フ印象ヲ私ハ持ツテ居リマス。今日私ニトツテハ最モ尊敬スベキ、最モ親愛ナル友人デアリマス。此ノ友人ガ、此ノ大學ニ最適任者トシテ迎ヘラレタ事ハ、私ノ日頃ノ考ト一致シ、喜バシイ限リデアリマス。同君ノ性質ハ、「スポーツ」ヲ例ニ取レバ中學、高等學校、大學ヲ通ジテ「ボート」ノ選手デ、至ル所黄金時代ヲ作ラレマシタ。之ハ同君ノ協同、忍耐、互讓ノ精神ト、全身ヲ擧ゲタ努力ノ結果デアリマシタ。此ノ事ハ「スポーツ」ノミナラズ、更ニ學問ヤ、人生諸般ニ對シテモ同ジ態度デアリマシタ。伊藤・猪子兩先生次イデ鳥瀉先生ノ御薫陶ヲ受ケラレ、外科學教室デ磨キガカハツタト思ハレマスガ、熊本ヘ行カレ、我々ノ想像出來ヌ様ナ困難ニブツツカツテ、更ニ人格ガ一層磨カレタト思ヒマス。困難ニ當ツテ挫ケル人ト、ブツツカレバブツツカル程、勵ミ、益々手腕人格ノ磨カレル人トアリマスガ、同君ハ此ノ後者ニ屬サレルモノト思ハレマス。即チ同君ノ大ヲナサレタノヲ見テモ、私ノ考ハ正シイト思ヒマス。萩原君ハ、外科學教室ノ傳統ヲ正流ヲ汲ンデ居ラレルト僭越乍ラ信ジテ居マス。青柳教授ト共ニ、外科學教室ノ隆盛ノ爲メニ突進セラレン事ヲ祈リマス。ドウカ教室ノ諸君モ、直チニ同君ノ胸中深ク飛ビ込ミ、赤心ト赤心トヲ接スル態度デ交ハラレタナラバ、其處ニハ多量ノ涙ト、隠レタ熱ノアル事ガオ解リニナルト信ジテ居リマス。萩原君ノ御健康ヲ祈リ私ノ語ヲ終リト致シマス。』

教室主任(青柳安誠教授)挨拶(登壇)

『カネテ空席デアリマシタ外科學第1講座ノ擔當ヲ萩原教授ガナサレル事ニナリ、今日ソノ就任式ヲ擧ゲマス事ハ、同第2講座ヲ擔當スル私トシテ喜ビニ耐ヘナイ次第デアリマス。當外科學教室ハ其ノ開設ノ當初カラ、他ノ大學ニ見ル様ニ何々教室ト言フ事ナク、第1講座、第2講座ト言ヒ、而モ渾然兩講座ガ玉トナリマシテ、内外總テノ事ニブツツカツテ來タノデアリマス。本日カラ我々ハ此ノ貴イ傳統ノ下ニ於テ、又ソノ傳統ノ中ニ生キテ一致協力、大學ノ持ツ使命及ビ外科學教室ノ持ツ使命ノ達成ニ向ヒ、邁進スル事ノ出來マス事ヲ喜ブモノデアリマス。私ハ此ノ喜ビ以外ニハ、申シ述ベル何物モナイノデアリマス。デ、唯此ノ一語ヲ以ツテ、御挨拶ニ代ヘ度イト存ジマス。』

整形外科學教室代表(濱西正太郎講師)挨拶(登壇)

『本日ハ土屋助教授ガ御挨拶ヲ申シ上ゲル筈ノ所ヲ、御近親ノ御病氣デ御歸省中ノ爲メ、私ノ如キ老人ガ御挨拶ヲ申シ上ゲル事ニナリマシタ。今度、外科學教室ニ萩原教授ガ新任ナサレタ事ハ、先程カラノ諸先生方ノ御話ノ通り、又20年來ノ私ノ存ジ上ゲテキル事カラ、誠ニ適任者ヲ得タト思ハレマス。過去數ヶ月間誠ニ鬱陶シカツタ外科學教室ノ空モ、先ニ青柳教授、今度萩原教授ノ御就任ニ依ツテ此處ニ始メテ朗カニナツタノデ、誠ニ喜シイ事デアリマス。晴々トシテ誠ニ私ハ嬉シイ。此處ニ謹シンデオ喜ビヲ申シ上ゲマス。サテ、外科學教室ノ空

ノ明朗化ヲ特ニ私ガ喜ブノハ、外科學教室ト整形外科學教室トガ三位一體ト言フ一種特別ナ形態ヲ取ツテ來テキルカラデアリマス。ソレハ、知ラン人ハ知ランカモ知レンガ(笑聲)研究室ヲ共ニシ、圖書、器具、機械ニ至ル迄、互ヒニ融通シ合ツテ勝手ニ使ヒ、一向遠慮ノ要ラス世帯デアリマス。ノミナラズ、3人ノ教授ガ互ヒニ協和シ指導ニ當ツテ、互ヒニ其ノ弟子ヲ匡正サレル状態デアリマス。ノミナラズ、醫員ノ循環制ガアリマス。即チ、ソレハ外科學教室ニ入ツタ者ハ1學期間ハ必ず整形外科學教室デ學ブ事デアル。之ハ他ノ大學ニハ何處ニモ見ラレヌ變ツタ「システム」デアル。之ハ初メハ或ハ一時的便法トシテ行ハレタカモ知レマセヌガ、私ハ之ハ非常ニ良イ「システム」ト思ヒ、外ニハ誇リ、内ニハソノ「システム」ノ存續ヲ主張シテ今日ニ至ツテ居リマス。眞ニ良イ「システム」デアルト言フノハ、外科醫ヲ一層良イ醫師ニ教育スルニハ此ノ「システム」デ養フニ限ルノデアリマシテ、ソウデナイト不具ノ醫者ガ出來ヌカト思ハレマス。出デ、地方ニ赴任サレタリ、又開業サレタリスル人ガ、屢々他ノ大學ノ出身者ノヨクシ得ナイ事ヲヨクシ、患者ノ福利ヲ増進シ、又心中得意デアリ、即チ又此ノ「システム」ニ感謝シテキル事ガ多イノデアリマス。萩原教授モ恐ラク其ノ1人デアラウト思フ。眞ニ之ハ良イ制度デアリマス。ガ、一方ニ於テハ、屢々迷惑ヲ蒙ル事ガアル。其ノ「システム」ガアル爲メニ、外科ニ居レバ、一學期來テモ曲リナリニモ整形ノ事ガ出來ルカラ、深く此ノ學ヲ究メル者ガ極メテ少イ。眞ニ少イ！其ノ爲メニ最近ノ極ク少數ナ、一人ノ講師、一人ノ助手ノミガ忙シイ事務ヲ取ツテキル。中堅ノ助手全部ガ應召シテキルト言フ状態デアル。カハル事ハ三位一體ノ建前カラ、何トカ各教授間デ御協議ニナリ、學者ヲ餘分ニ常ニ作ツテ置クト言フ様ナ同情アル便法ガ講ゼラレヌカト思ハレマス。眞ニ近頃ノ状態デハ、トテモ忙シイ。(笑聲)又モウ1ツ此ノ「システム」デアレバ、「整形外科ハ外科ト同ジモノデハナイカ？」ト考ヘル人ガ出テ來ナイトモ限ラス。又整形外科ト言フカラ形ヲ整ヘルト言フノデ、禿トカ母斑トカデ來ル者ガアル。之ハ然シ患者デアルガ、醫者モ事情ヲ知ラス者ハ、カハル事ノ様ニ誤解シテキルカモ知レヌ。(笑聲)ガ、斯様ナ事モ整形外科ノ仕事デハアルガ、手足ノ働キヲ回復サセルノガ、眞ニ整形外科ノヤル事デアル。此ノ點ヲ間違ヘラレヌ様ニ。(笑聲)近頃白衣ノ勇士ノ手足ハ鐵ノ棒デアル。之ハ形ハ整ツテキナイガ、働キハ整ツテキル。之ハ整形外科ノヤル仕事デアル。整形ハ何ンデモ彼デモ「ギプス」ヲ卷ケバ好イト思フ人モアルガ、ソレモ體トキチント合フ迄ニハ、半年、1年ノ修業デハ出來ヌ。又整形外科ハ外科ノ應用ノ一端ニ過ギヌ、外科醫ナラ誰デモ出來ルト思フ人ガアルカモ知レヌ。ソレハ3、40年前、整形外科ノ發達途上デハソウデアツタカモ知レヌ。ガ、今日デハ整形外科ハ立派ナ體系ヲ持ツタ學問トナツテキル。學ノ獨立ト言フ事ヲ尊重シテ戴キ度イ。動物園デ他人ノ乳デ育ツタ「ライオン」デモ、大キクナレバ別ノ檻ニ入レネバナラヌト同ジデアルト思フ。又概シテ外科手術ノ效果ハ靦面デアル。所ガ、整形外科デハ手術ノ效果ハソウ手取り早くハ現ハレナイ。例ヘバ指1本デモ形ハ幾ラ解剖學上ノ形ヲ整ヘテモ、ソノ働キヲ恢復スル迄ニハ數週乃至數ヶ月ノ醫師ノ

努力ト患者ノ忍耐ヲ要スル。又整形外科的病氣ノ經過ハ一般ニ永イ。斯ク外科ト整形外科トハ、多少、否大イニ趣ヲ異ニシタモノデアル。ソレデ循環的ニ來ラレタ外科ノ醫員ハ、カ、ル事ヲ頭ニ置カレ、御修業ヲ成サラン事ヲ願ヒマス。又外科ノ兩教授ハ、教育ノ協同責任者トシテ、特ニカ、ル點ニ御注意ヲ願ヒ上ゲタイ。

サテ、オ隣リノ寺ニハ、住職ガ2人揃ハレタガ、私ノ方デハマダ不幸ニシテ住職ガ無イ。(笑聲)何シロ參詣ノ客ハ毎日多ク來ラレルガ、役僧ガ極メテ少イ。實際極メテ少イ。之デハ本堂ノ御本尊ニ埃ガカ、ラヌトモ限ラナイ。學問ノ尊嚴ニ埃ガカ、ラヌトモ限ラナイ。一山ノ面目、學問ノ名譽ノ爲メ東西ノ兩本山ニ劣ラヌヤウ、學問見識ニ富ミ、人格德望ノ高イ、健康ニ恵マレタ、春秋ニ富メル、且長ク此ノ寺ヲ守ツテ下サル熱意ノアル善知識ヲ撰バレ、カ、ル盛大ナ晋山式ヲ早く見タイモノト思ヒマス。(笑聲)ソノ爲メニハ兩隣リノオニ方ハモトヨリ、管長サン、院長サン、ソノ他善知識皆様ヘオ助ケヲ願ヒタイ。特ニ萩原教授ニハ、此ノ特別ノ關係ヲ述ベテ御助力ヲ願ヒスル次第デアリマス。甚ダ餘談ヲ述ベマシタガ、ドウゾ宜シク。』

外科學教室員(大澤達助教授)挨拶 (壇下ニテ萩原教授ニ向ヒ)

『私ガ外科教室員一同ヲ代表シテ御挨拶ヲ申シ上ゲタイト思ヒマス。我々一同ノ者ニトツテハ教室ノ先輩トシテ我々ノ最モ尊敬シテキル萩原教授ヲ、外科學第1講座ノ指導者トシテオ迎ヘ出來タ事ハ、我々ノ最モ光榮トシ、我々ノ衷心ヨリ喜ンデキル所デアリマス。我々ノ殆ンドハ、萩原教授ニ今回始メテオ目ニカ、ルノデアリマスガ、カネテ同教授ノ御高名ハ存ジテ居リマス。同教授ハ永ク熊本ニ居ラレ、豐富ナ經驗ヲ積マレ、ソノ學術上ノ蘊蓄ハ世ニ定評ノアル所デアリマス。我々ハ此處ニ最モ嚴肅、敬虔ナ態度デ今日萩原教授ヲオ迎ヘシ、將來モ此ノ態度デ御薫陶ヲ仰ガン事ヲ期シテ居リマス。

我ガ國ハ今ヤ重大ナ時デアリマスガ、我ガ大學、我ガ外科學教室モ重大ナ時デアルト思ヒマス。此ノ時全幅ノ信賴ヲ以ツテオ迎ヘシタ萩原教授ノ御愛護ノ下ニ一致團結シ、内ニハ君子ノ交リ、外ニハ一丸トナツテ當リ、高潔ナル精神デ光輝アル外科學教室ノ歴史ニ、一層ノ光ヲ添ヘンモノト誓フ次第デアリマス。ドウカ我々ノ意中ヲ汲マレテ、御指導下サラン事ヲ願ヒ致シマス。』

萩原教授挨拶

來賓席ニ向ヒ(降壇)

『教室員諸君ニ御挨拶致シマスニ先立ち、御臨席ヲ得マシタ名譽教授、諸教授、先輩ノ諸先生ニ一言御挨拶ヲ申シ上ゲマス。私ガ本學教授トシテ就任致シマスルニ當リ、本日教室員諸君ニ御挨拶ヲ致ス機會ヲ得マシタ時、此處ニ諸先生ノ御臨席ヲ得マシタ事ハ、洵ニ光榮ノ至リニ存ジマス。名譽アル京都大學ノ外科學教室ニ私如キ者ガ教授トシテ臨ミマス事ハ、私個人ニトツテハ例フルニ物ナキ名譽デアリ、又一家一門ノ名譽、之ニ過グル物ハアリマセヌ。然

シ續ツテ自ラヲ省ミ自ラヲ測リマスル時、伊藤・猪子兩教授ガ創設サレ、鳥瀉・磯部兩教授ニ依ツテ繼承セラレマシタ此ノ赫々タル歴史ニ富ム當教室ニ私ノ如キガソノ後繼者トシテ臨ミマスルガ如キハ、全ク其ノ任ニ非ザル事ヲ是恐レルノデアリマス。當初、交渉ヲ受ケタ時、唯々不徳・不敏・菲才、到底其ノ任ニ非ザル事ヲ申シ、オ斷リ致シタノデアリマスガ、遂ニ斯様ナ状態ニ立チ到ツタノデアリマス。今日モ、オ引受ケハ致シマシタガ、自信ハゴザイマセン。如何ニシテ職責ヲ全ウ出來マスカト唯之ヲノミ考ヘテ居リマス。故人ノ任重クシテ道遠シトハ此ノ事デアラウカト言フ感ニ耐ヘマセン。私モ一旦オ引受ケ致シマシタ以上、些、意ニ決スル處ガ無イデモゴザイマセン。一切ノモノヲ放擲シテ、出來得ル限り努力致サウト決心シテ居リマスカラ、御臨席ノ諸先生モドウカ御指導御鞭撻下サイマシテ、其ノ任ノ全ウサレマスルヤウ、御援助下サレン事ヲ衷心オ願ヒ致ス次第デアリマス。唯今ハ、諸先生カラ數々ノ御詞ヲ戴キ、光榮ノ至リデアリマス。諸先生ニ御禮ヲ申シ上ゲルト共ニ、之ヲ以ツテ諸先生ヘノ御挨拶ト致シ度イト思ヒマス。』

教室員ニ向ヒ(登壇)

『次ハ、教室員各位ニ御挨拶ト同時ニ、オ願ヒヲ致シ度イト思ヒマス。此ノ度、私ガ本學教授トシテ、外科學教室ニ勤務ヲ命ゼラレマシタガ、本學ノ職員トシテ教授、助教授、講師、助手、副手、各々其ノ分ガアリ、其ノ職責ガアリマス。夫々ニ應ジテ多少ノ違ヒハアリマスガ、等シク國家ノ官吏タルニ變リハアリマセヌ。私ハ永ク文部省ノ官吏トシテ勤メテ參リマシタガ、事務的ノ官吏デモ、又學問ヲ研究スル者トシテモ、官吏ノ歩ムベキ道ニ大シテ違ヒガアルモノデアリマセヌ。官吏ノ歩ム道ハ、實ニ幅ノ廣イ誠ニ歩ミ易イ道デアリマス。諸君、今後我々ハ一緒ニナツテ、間違ヒノ無イ道ヲ大手ヲ振ツテ歩カウデアリマセンカ。我々ハ事務的官吏デハアリマセヌ。醫學ヲ研究シ又醫師トシテ御奉公ヲ致スベキ職ニ在リマス。斯様ナモノガ外科學教室ニ在ツテ研究ニ從事致スニツキマシテハ、其處デハ最モ純心ナ學徒デナケレバナリマセヌ。ムシロ、殉教者ニ等シイ熱ノアル者デナクテハナリマセン。カハル點ハ、此ノ私カラ彼レ此レ申ス迄モナク、諸君ハ恩師鳥瀉先生カラ骨ノ髓迄泌ミ込マセラレテ居レル事ト思ハレマス。今後私モ諸君ト共ニ、學問ニ專心シ、日夜共同生活ヲ營ム事ニナリマスガ、凡ソ共同生活ヲナツ、1ツノ目的ニ進ム爲メニ何ヨリ大切ナ者ハ人ノ和デアリマス。オ互ヒノ中ニ、自ラノ利益ヲノミ打算スルガ如キ者ガアレバ、夫デハ團結ジテ1ツノ目的ニ進ム事ハ出來マセヌ。世上幾多ノ不幸ガ人ノ和ニ於テ缺クル所ニ其ノ因ヲ爲セル事ハ、幾多ノ事實、幾多ノ先例ガ教ヘテ居リマス。諸君、私ハ唯今外科學教室員ガ何十人オイデニナルカ知リマセンガ、將來何百人ニナリマセウトモ、日夜共ニ生活ヲシ乍ラ御奉公ヲ致サナケレバナラヌノデアリマスカラ、カハル點ニ間違ヒノ無イ様ニシヨウデアリマセンカ。我々教室員ノ中、誰カ一人ニ喜ビガアルナラバ、總員手ヲ打ツテ悅ビヲ分チ、誰カ一人ニ憂ヒガアレバ、全員共ニ憂ヒ、又悲シミガアレバ、一緒ニ泣イテアゲヤウデアリマセンカ。

兎 = モ角 = モカ、ル氣持チデ 日夜切磋琢磨シテ 相共 = 修養シ、一生懸命 = 勉強シテ進ム事
 が我々が先生ノ御鴻恩 = 報ユル道デアリ、又國家 = 御奉公致ス道 = 外ナラヌト思ヒマス。今
 日國家非常ノ時 = 當リ、國家 = 在ツテ 銃後御奉公ノ一員トシテカ、ル氣持チデ進ム事が、何
 ヨリ大切ダト思ヒマス。ドウカ、外科2ツ、整形外科1ツハ、皆一緒 = ナリ、一生懸命 = 勉強
 シヤウデハアリマセヌカ。是ガ私ノオ願ヒデアリマス。

唯今ハ、濱西先生並ビ = 大澤助教授カラ、鄭重ナオ言葉ヲ戴キ感謝 = 耐ヘマセヌ。オ禮ヲ申
 シ上グルト共 =、御挨拶ヲ致シ、オ願ヒヲ致ス次第デアリマス。』

閉式 5時30分。

式後、參會者一同打チ連レテ直チ = 樂友會館 = 參集シ、同教授歡迎晚餐會 = 出席ス。霽々ノ
 氣一堂 = 滿チ、乾杯ノ音高ラカ = 響イテ、談笑數刻、8時30分頃散會トナツタ。

重ナル來賓出席者芳名(五十音順)

磯部喜右衛門、伊藤 弘、尾崎良純、菊池武彦、木村 廉、澤村榮美、正路倫之助、杉山繁
 郎、塚原仲光、戸田正三、鳥潟隆三、中西龜太郎、西島藤治郎、原 守藏、星野貞次、松本信
 一、三浦百重、盛新之助。